



SUPER GT 2026 第6戦 SUGO 300km レースレポート

開催日：公式予選 9月19日(土)／決勝 9月20日(日)

開催地：宮城県 スポーツランドSUGO

<予選レポート>

前回の第5戦鈴鹿大会では、PACIFIC RACING TEAM創設以来初となるポールポジションを獲得。チームとドライバーにとっても初めて手にした最前列からのスタートであったが、悲願の初優勝に向けていつもより念入りに準備を進め、決勝でもミシュランタイヤのウォームアップ性能を活かして幸先のいいスタートを切って見せた。藤原優汰選手から冨林勇佑選手へとバトンを繋いで着実にアドバンテージを広げ、一度もトップの座を譲ることなく、悲願の初優勝をポール・トゥ・ウインという最高の形で成し遂げた。これまでチーム全員で積み重ねてきた努力が、ようやく大きなひとつの結果として実を結んだ鈴鹿大会。誰にとっても決して忘れることのできない一戦となったが、その歓喜を胸に刻みながら、チームはすぐに次なる戦いへと目を向けた。初勝利によって得た大きな自信と確かな手応えをさらなる力へと変え、もう一度チーム全員で最高の景色を見るために。PACIFIC RACING TEAMは、9月19～20日にスポーツランドSUGOで開催された「2026 AUTOBACS SUPER GT Round6 SUGO GT 300km RACE」へと挑んだ。

第6戦SUGO大会は前戦と同じ300kmレースということから、引き続き冨林選手と藤原選手の2名体制で挑んだ。しかし、前戦鈴鹿大会で悲願の初優勝を成し遂げた9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」には、その勲章ともいえる52kgのサクセスウエイトを搭載。さらに今回は、PACIFIC RACING TEAMとして初めてサクセス給油リストラクターの調整も併用され、これまでとは異なる条件のなかで戦うこととなった。加えて、今大会からはNAC(中日本自動車短期大学)の学生メカニックにも新たなメンバーが加入。ハンディキャップだけでなく、チーム体制とい

う面でも新たなスタートを迎える一戦となった。それでも、初めて経験することのひとつひとつにチーム全員で向き合い、さまざまな状況を想定しながら可能な限りの準備を整えて第6戦SUGO大会へと乗り込んだ。

迎えた予選日は、朝から霧雨のような細かな雨が降り続き、早々にウエット宣言が出される不安定なコンディションとなった。しかし、公式練習の開始時刻が近づくにつれて雨は次第に止み、セッションはドライコンディションでスタート。まずは富林選手がステアリングを握り、ニュータイヤを装着してタイム出しを行うと、3周目に1分19秒180を記録した。走り始めからクルマのフィーリングは決して悪くなく、チームはそこからさらなるポテンシャルを引き出すべくセットアップの確認を進めていく。52kgのサクセスウエイトと給油リストリクターというこれまでにない条件のなかでも9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」の力を最大限に引き出せるよう、ドライバーからのフィードバックをもとにエンジニア、メカニックが細かなアジャストを重ね、予選、そして決勝を見据えながら一步步車両を仕上げていった。そのあと、富林選手から藤原選手へとステアリングを託す。スポーツランドSUGOでの走行経験がまだ少ない藤原選手に、コースへの習熟も兼ねてできる限り多くの走行時間を確保することも、今回の公式練習における重要なメニューのひとつだった。

セッションはドライコンディションで始まったものの、終盤には再び雨が降り出してウエットへと変化。刻々と路面状況が変わる難しいコンディションとなり、思うようにセットアップを進めることができない状況ではあったが、藤原選手は22周を走り込み、予選と決勝に向けて自身の感覚を9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」へと合わせ込んでいった。最終的に公式練習はトップから1.491秒差の21番手で終了。順位だけを見れば決して満足できるものではなかったものの、チームが重きを置いていた決勝でのペースには手応えも感じていた。さらに、前戦鈴鹿で悲願の初優勝を成し遂げたこともチーム全体の大きな自信となり、難しい状況のなかでもピットには前向きな雰囲気広がっていた。藤原選手も「走行経験こそ少ないですが、好きなサーキットなので、しっかりいい思い出にして帰りたいです」と意気込みを語っていた。限られた走行時間のなかで得られたデータをもとにさらにマシンを仕上げ、ひとつでも前のグリッドを掴むべく、PACIFIC RACING TEAMは公式予選へと歩みを進めた。



迎えた予選Q1は曇り空の下、気温23度／路面温度28度のところどころにウェットパッチが残るドライコンディションで始まった。Q1 A組に出走した9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は、富林選手に託された。じっくりとタイヤを温めた富林選手は、4周目からアタックを開始。まずは1分18秒975をマークすると、翌周にはそこから0.156秒タイムを縮め、1分18秒819を記録する。しかし、Q2進出圏内にはあと一步届かない。さらなるタイムアップを目指して6周目もアタックを続けたが、SPコーナーでわずかにリヤが滑ったことでタイムを失い、ベストタイム更新には至らなかった。想定していた以上に気温が低く、持ち込んだタイヤをコンディションにうまく合わせ込むことができなかったことも響き、予選は27番手。前戦のポールポジションから一転、今回は後方から追い上げを狙うレースとなった。

それでも、ここで下を向く者はいなかった。翌日の決勝は天候が崩れる可能性もあり、スポーツランドSUGOではレース中に何が起ころか分からない。富林選手も「決勝は雨も降る可能性もありますし、そうすれば一気にチャンスも巡ってくると思うので、頑張って追いつきたいです」と、すでに気持ちを決勝へと切り替えていた。公式練習で感じていた決勝ペースへの手応えも、チームにとってはひとつの希望となる。27番手からどこまで巻き返すことができるか。PACIFIC RACING TEAMもその思いに応えるべく、決勝で訪れるチャンスを確実に掴み取れるよう、チーム全員で万全の状態へと仕上げていった。

<決勝レポート>

迎えた決勝日は前日同様に曇り空となり、断続的に雨を降らせ、蒸し暑さも感じるほどだった。それでもスポーツランドSUGOには連日多くのファンが訪れていた。決勝前に行われたウォームアップ走行では、場所によっては大きな水飛沫を上げるほどの雨量となっていたが、ファンの期待に応えるかのように次第に雨は止み、レコードライン上は乾き始めていた。



しかし、ひとたびラインを外せば足元をすくわれかねないウエットパッチが各所に残っていたことから、レースはSC(セーフティカー)先導で幕を開けた。決勝レースのスタートドライバーを務めたのは、今シーズン幾度もその大役を任されてきた藤原選手だった。まずはSC先導の下でコンディションを確認しながら慎重に周回を重ね、5周目からいよいよレーシングスピードでの勝負がスタートした。27番手という後方からのスタートとなったものの、藤原選手は序盤から果敢な走りを披露。難しい路面状況を見極めながら前を走るライバルたちをひとつずつ攻略し、13周目には22番手までポジションを上げてみせた。

さらに、次なるターゲットとなった360号車「RUNUP × SOL GT-R」を追い詰め、18周目にはオーバーテイクに成功。その後は、抜きつ抜かれつの激しい攻防となったが、24周目に再び360号車「RUNUP × SOL GT-R」を捉え、今度こそ引き離しにかかろうとしていた。しかし、その矢先にコース上ではGT300とGT500の車両が接触するというアクシデントが発生し、再びSCが導入される。藤原選手が懸命な走りで築いてきた後続とのギャップはリセットされることとなったが、チームはこの状況でも冷静にレース展開を見極め、次なる一手を探っていった。31周目にレースが再開されると、ミニマムの周回数を満たしていたことから早々にピットへ向かう車両も多く見られた。そのなかで、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」はあえてコース上に留まり、藤原選手のスティントを引っ張る戦略を選択。刻々と変化するレース状況を確認しながら好機をうかがい、40周目に満を持してピットへと呼び戻した。

藤原選手から冨林選手へとステアリングを託すと、ここからはピットクルーの腕の見せどころとなる。ひとつのミスも許されない緊張感のなか、メカニックは迅速かつ正確なピットワークを遂行。藤原選手がコース上で稼いだものを確実につなぎ、冨林選手を再び戦いの場へと送り出した。チームの戦略とピットワークは大きな成果へとつながった。全車がルーティンのピット作業を終えた49周目には、27番手スタートだった9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は14番手まで順位を上げることに成功。冨林選手もその流れに応えるように力強いペースで周回を重ね、前を走るマシンとの約2秒のギャップをじわじわと削り取っていく。そして62周目、ついにライバルを射程圏内へと捉えると、オーバーテイクを決めて13番手へとポジションアップを果たした。さらなる上位進出も狙いたいところだったが、レース終盤になると想定以上にタイヤの摩耗が進み、思うようにペースを上げられない苦しい状況を迎える。それでも冨林選手は残されたタイヤ



の状態を見極めながら粘り強く走り、最後までポジションを譲ることなく13位でチェッカーフラッグを受けた。

その後、上位車両にペナルティが科されたことで、9号車「PACIFIC ウマ娘 NAC BMW」は12位へと繰り上がった。27番手という後方グリッドから実に15ポジションアップに加え、貴重な4ポイントを獲得した。サクセスウエイト52kgと給油リストラクターというこれまでにないハンディキャップを背負うなかでも、藤原選手が序盤から積極果敢な走りで道を切り拓き、チームも戦略と迅速なピットワークでその勢いをつなぐ。そして最後は冨林選手が粘り強い走りでさらにポジションを押し上げ、確実にポイントを持ち帰ることができた。また、今大会から新たなメンバーを迎えたNACの学生メカニックたちも、実戦という緊張感のなかで迅速かつ正確なピットワークを披露。新たな体制で臨む最初の一戦ということもあり、チーム全体としてまだ手探りで対応しなければならない場面も少なくなかったが、それぞれが自らの役割をしっかりと果たし、ひとつの結果へとつなげることができた。

さらに、今大会を終えてトップとは39ポイント差のランキング13位につけており、チャンピオンシップという面でも今回持ち帰った4ポイントは大きな意味を持つ。シーズンも終盤戦へと差しかかるなか、まだ上位進出の可能性を残しているだけに、厳しい条件において今回のSUGO大会で着実にポイントを積み重ねることができたことは、チームにとって大きなプラスとなった。前戦鈴鹿大会での初優勝とはまた違った形ではあるものの、さまざまな新しい環境や条件に対応しながら、ドライバー、エンジニア、メカニックとチーム一丸となって掴み取った12位という結果と貴重な4ポイント。その価値は決して小さくなく、新たな体制でもしっかりと戦えることを確認できたことは、PACIFIC RACING TEAMにとって今後へつながる大きな収穫となった。

次戦の舞台は大分県・オートポリス。今大会とは異なる3時間レースとなり、再び久保凜太郎選手を迎え、冨林選手、藤原選手との3名体制で挑む。長丁場だからこそ、ドライバーの速さだけでなく、戦略やピットワークを含めたチームの総合力がより一層試される一戦となる。前戦の鈴鹿で掴んだ勝利の自信と、今回のSUGOで改めて確認したチームの力を胸に、PACIFIC RACING TEAMは3人のドライバーとともに、残された戦いでもひとつひとつのチャンスを確実に結果へとつなげるために準備を進めていく所存だ。



COMMENT



総監督 小林弘和

今回は52kgのサクセスウエイトに加えて、チームとして初めて給油リストラクターの調整も入り、簡単な週末ではありませんでした。予選も27番手と厳しい位置からのスタートになりましたが、決勝では藤原選手が序盤からしっかり順位を上げてくれて、戦略やピット作業もうまく噛み合い、畠林選手も終盤にオーバーテイクを披露して最終的に12位まで追いつき、4ポイントを持ち帰ることができました。この条件のなかでのポイント獲得は、チームとして非常に大きかったと思います。また、今回からNACの学生メカニックも新しいメンバーになり、チーム全体として新しい環境に慣れていく部分もありましたが、決勝ではプレッシャーのかかるなかでも迅速かつ正確なピット作業をしてくれました。新しいメンバーも含めて、チーム全員でひとつの結果につながれたことを嬉しく思います。次戦も長いレースのなかで訪れるチャンスを確実に掴めるよう、チーム全員でしっかり準備して臨みたいと思います。今回もたくさんのご声援をいただき、本当にありがとうございました。次戦も引き続き、PACIFIC RACING TEAMへのご声援をよろしくお願いいたします。



畠林勇佑 選手

予選ではあれだけ全力でアタックしてもタイムが出せなかったのが、悔しいですね。ロングランのペースこそ悪くはありませんが、今回はサクセスウエイトとサクセス給油リストラクターの調整が入っているので、影響はもちろんあると思いますが、初日を終えた時点ではタイヤのマッチングや練習走行でセットアップが進められなかったなど、他にも要因はあると思います。ですが、決勝では藤原選手がコツコツと順位を上げてくれて、いい状態で繋いでくれました。今回はNACの新しい学生メカニックがいるなかでも、作業もとても早く、素晴らしいピット作業でコースに送り出してくれました。終盤はタイヤが厳しく、ペースも少し落ちてしまいましたが、序盤に稼いだリードでなんとか順位を守りきることができました。しっかりと継続的にポイントを獲得できて良かったです。次戦も続けてポイントを獲得できるように準備を進めていきます。



藤原優汰 選手

スポーツランドSUGOは、僕にとってあまり走った経験が少ないコースだったので、合わせ込む時間を確保して頂いたチームにはとても感謝しています。公式練習はダンプコンディションでの走行でしたが、サクセスウエイトとサクセス給油リストラクターの調整によって厳しい状況だなという印象でした。車両に貼っているウエイトのステッカーを見ると勝った証ということもあり、嬉しさもありますが、やっぱりステアリングを握ると辛いですね。それでもライバルたちはここでも強く戦っているので、僕たちもやっぱりついていかなければならないという思いで決勝に挑みました。ウォームアップ走行で畠林選手に最終調整をして頂いたのがプラスに働き、決勝でもペースを安定させることができ、いつでも前の車に隙があれば狙える状態を作ることができました。やっぱりコンスタントにポイントを取っていくことが大切だと思っているので、次戦オートボリスに繋がる結果を持ち帰ることができて嬉しいです。次戦は久保選手も加わって3人で戦うので、チーム一丸となって表彰台を狙っていきたいなと思っています。



PARTNER



© Cygames, Inc.



Motorsport



SPONSOR

